

相対主義とアイデアをめぐる対話

——数学的アイデア・意味としてのアイデア・価値的アイデア——

伊 佐 敷 隆 弘

概 要

ソクラテスは、道徳や法律を崩壊させるおそれのある相対主義に対抗するために、美や善などの価値に関する定義を求め、我々がそのような定義を知らないこと（無知）の自覚を人々に促した。プラトンは、知に関するソクラテスの厳しい要求に対してアイデア論によって答えようとした。描かれた三角形が感覚の対象であるのに対し、証明の中に登場する三角形は、①知性の対象であり、②厳密に正確（完全）であり、③消滅せず、④人間から独立に存在する、という4つの特徴を持つ（数学的アイデア）。さらにアイデアには⑤ひとつであるという特徴があるから、アイデアは「三角形」「人間」のような一般名に意味を与えることができる（意味としてのアイデア）。そして、多くの対象を「美しい」というひとつの語で描写できるのは、それらが「美」というひとつのアイデアに似ているからである（価値的アイデア）。このように、数学的アイデアは意味としてのアイデアを介して価値的アイデアとつながる。プラトンのアイデア論は、数学論・言語論・価値論を総動員して、相対主義に対抗しようとした試みであった。

はじめに

哲学の始まりであるソクラテス¹⁾は一文字も書かず、人々との対話によって哲学をおこなった。弟子のプラトン²⁾が残した著作（対話篇）はソクラテスを主人公とする戯曲形式で書かれていた³⁾。現代の哲学研究において支配的である「論文」という形式ではなく、古代ギリシアでは「対話」という形式で哲学がおこなわれていた。対話においては、「問い、答え、さらに問う」という対話者相互の努力によって、難問が一步一步追究されていく。本論文は、「対話形式によっておこなわれたソクラテスやプラトンの哲学の核心を明らかにするために、あえて対話形式を用いる」という試みである。典拠や学術的な議論は注に記したが、読者はまず本文を通読し、対話としての哲学を経験してみたい。

1) Sōkratēs（前469頃～前399年、ギリシア）。哲学者。アテナイ出身。死刑に処され死んだ。

2) Platōn（前427～前347年、ギリシア）。哲学者。アテナイ出身。学園アカデメイアを創設した。ソクラテスを主人公とする戯曲形式の本（対話篇）を約30篇書いた。

3) 最晩年の作品『法律』だけがソクラテスが登場しない唯一の例外である。

I ソクラテスの「知への愛」

1 デルフォイの神託事件

P氏 今日では哲学の始まりについて話そうと思う。

Q氏 「哲学の始まり」か。哲学はPさんの専門だね。僕は、哲学に興味はあるんだけど、知識はほとんどない。Pさんの話を理解できるかな。

P氏 哲学を理解するためにいちばん必要なのは知識じゃない。真実から目をそらさない勇気だよ。

Q氏 なるほど。「真実から目をそらさない勇気」か。がんばってみよう。

P氏 「哲学」という学問名は英語の「philosophy」の訳語⁴⁾であり、「philosophy」はギリシア語の「フィロソフィア」が語源だ。「フィロソフィア」というのは「知（ソフィア）への愛（フィロ）」という意味であり、ソクラテスのやっていたことを弟子のプラトンがこう呼んだのが始まりなんだ⁵⁾。

Q氏 ソクラテスのやっていたことって？

P氏 ソクラテスは紀元前5世紀にギリシアの都市国家アテナイに生まれた人で、父親は石工で母親は助産師だった⁶⁾。石を切り出して加工したり、建築物の装飾として彫刻したりするのが、石工の仕事だ。

Q氏 ソクラテス自身は何の仕事をしていたんだい。

P氏 おそらく若い時は父親と同じく石工の仕事をしていたと思われる⁷⁾。当時のギリシアでは、子が親の仕事を引き継ぐのが普通だったからね⁸⁾。

Q氏 石工の仕事と「フィロソフィア（知への愛）」がつながるのかな。

P氏 いや、実はソクラテスの人生に「デルフォイの神託事件」というのが起こったんだ⁹⁾。彼が40歳のころだ。この事件がきっかけで、ソクラテスはフィロソフィア（知への愛）を始めた。デルフォイというのはアテナイから70キロほど離れたところにある聖域で、そこにアポロン神をまつた神殿がある。古代ギリシアの人々はアポロン神からの神託を聞くためにデルフォイを訪れたんだ。

4) 翻訳したのは西周（にし・あまね、1829～1897年、日本）である。栗島（1966）や石井（2019）によると、西は約1400の訳語を作り出し、そのうち570語以上が現在でも用いられている。「論理学」「倫理学」「化学」「幾何学」「心理学」「物理学」「地質学」「植物学」「動物学」「経済学」などの学問名や「帰納」「演繹」「真理」「命題」「理性」「主観」「客観」「現象」「實在」「感覚」「観念」「意識」「取引」「消費」などの専門用語が西の作った訳語である。

5) 納富（2017）pp. 23-25によると、「フィロソフォス」（愛知者）という語が初めて用いられた前6世紀当時は「単なる博識家」という否定的な意味だった。しかし、納富（2015）pp. 5-6によると、プラトンは、「対話篇で描いたソクラテス」を「フィロソフォス」（愛知者）と呼ぶことを通して、「フィロソフィア」（知への愛）という営みそのものを新たに創り出し、この語を肯定的な意味で用い始めた。

6) ディオゲネス・ラエルティオス（1984）p. 132によると、ソクラテスは石工の父ソプロニスコスと助産師の母パイナレテの間に産まれた。

7) 納富（2021）p. 370.

8) 岩田（2014）p. 41.

9) プラトン『ソクラテスの弁明』20E-23C。納富（2012）pp. 119-121は「デルフォイの神託事件」がプラトンによる創作である可能性を指摘するが、本論文では通説に従い「デルフォイの神託事件は実際に起こった」と仮定する。

Q氏 古代ギリシア人は信心深いんだね。

P氏 そうなんだ。結婚や商売のような個人的なことがらについてだけでなく、都市国家の政策決定について神託を求めることもあった。たとえば、紀元前5世紀にアジアの大国ペルシアがギリシアに攻めてきたとき、都市国家アテナイは、戦う方法を決めるためにデルフォイの神託を求めた。

Q氏 ほう、政策決定を神託に委ねたんだね。で、どんな神託がくだったのかな。

P氏 「ゼウスは（アテナイの守護神である）アテナのために木の荂をば、唯一不落の壘となり、汝と汝の子らを救うべく賜わるであらうぞ」という神託だった¹⁰⁾。

Q氏 よく意味が分からない神託だな。

P氏 「ゼウス神が都市国家アテナイに木の荂を与える。そして、その荂がアテナイ人を救うだろう」という意味だよ。

Q氏 「木の荂」って何のことだ？

P氏 デルフォイの神託というのはいつも謎なんだ。アテナイの人々はこの神託をどう解釈すべきか議論した。結局「木の荂」とは「木でできた船」のことだと解釈して、たくさんの船を作り、ペルシア軍と戦ったんだ。その結果、アテナイ軍が勝った。これは紀元前480年の「サラミスの海戦」という戦いだ。

Q氏 自分たちの運命を神託に賭け、そして、その賭けに勝ったということだね。

P氏 デルフォイの神託には大きな権威があったんだ。ところで、ソクラテスに起こった「デルフォイの神託事件」だけど、ソクラテスの友人にカイレフォンという男がいた。彼は紀元前430年頃にデルフォイまで行き「この世にソクラテスより賢い人はいますか」と巫女を介してアポロン神に質問した。すると、アポロン神は「この世にソクラテスより賢い人はいない」と答えた¹¹⁾。

Q氏 ペルシア戦争のときの神託に比べると、分かりやすいな。

P氏 いや、ソクラテスにとっては大きな謎だった。ソクラテスは「自分がこの世で一番賢い」とは思っていなかったからね。

Q氏 じゃあ、ソクラテスは「この神託は間違っている」と思ったのかな。

P氏 いや、信心深い彼にとって、「神託が間違っている」と考えることも難しかった。

Q氏 結局、ソクラテスはどう思ったんだ？

P氏 「自分がこの世で一番賢いなんてありえない。でも、神が間違はずがない」と考えて、ジレンマに陥ってしまった。長い間、アポロン神の真意についてあれこれ考えたけれど、彼にはどうしても分からなかった。神託を受け入れることも否定することもできなかった。

Q氏 板挟みになってしまったんだね。

P氏 しかし、最後にソクラテスは決心した。「仕方がない。『賢い』という評判の人のところへ行こう。そして、アポロン神に向かって『この人の方が私より賢いです。アポロン神よ、あなたの神託は間

¹⁰⁾ ヘロドトス『歴史』「巻7（ポリュムニアの巻）」141節。

¹¹⁾ プラトン『ソクラテスの弁明』21A。

違っています』と反論しよう。こうするしかない。」こんなふうに決心したんだ¹²⁾。

2 無知の自覚

Q氏 ソクラテスはどんな人のところへ行ったのかな？

P氏 まず政治家、次に芸術家、最後に職人のところへ行った¹³⁾。

Q氏 そして「この人の方が私より賢いです」とアポロン神に向かって言ったんだね。

P氏 いや、そうしなかった。彼らと話しているうちに、ソクラテスは「おや、評判と違う。この人は全然賢くない」と思うようになったんだ¹⁴⁾。

Q氏 じゃあ、ソクラテスは「自分の方が賢い。やっぱり神託は正しかったんだ」と思ったのかな。

P氏 いや、そういうふうにも思わなかった。ソクラテスは「自分も賢くないけど、この人も賢くない」と思ったんだ。

Q氏 そうか。でも、ソクラテスが賢くないとすると「ソクラテスが一番賢い」という神託はやっぱり間違いだということになるね。

P氏 いや、ソクラテスは「神託は正しい」という結論にたどり着くんだ。

Q氏 え？ どうしてそうなるんだ。よく分からないな。

P氏 ソクラテスは彼らと話しているうちに、彼らが「自分は賢い」と自負していることに気づいた。

Q氏 「賢い」という評判の人たちだから、本人自身も「自分は賢い」と思っていそうだね。

P氏 しかし、ソクラテスに言わせると、実際は、彼らは賢くない。そのくせ「自分は賢い」と思っている。

Q氏 ソクラテスから見れば、その人たちは自惚れているということだね。

P氏 ソクラテス自身はどうかと言えば、「自分は賢くない」と思っているから、自惚れていない。つまり、それらの政治家も芸術家も職人も、そしてソクラテス自身も「賢くない」「無知だ」という点は同じだ。しかし、彼らが自分の無知を自覚しておらず「自分は賢い」と自惚れているのに対し、ソクラテスは自分の無知を自覚している。この点が違う。

Q氏 無知を自覚しているか、していないかの違いだね。

P氏 このことに気づいたときに、ソクラテスは神託の意味が腑に落ちたんだ。「ソクラテスは賢くない。しかし、ソクラテスは自分の無知を他の誰よりも自覚している。この意味でソクラテスは他の誰よりも賢い。」こんなふうに神託を解釈したんだ¹⁵⁾。

Q氏 う～ん、かなり巧妙というか、アクロバティックな解釈だな。

P氏 確かに、通常の場合、「賢い」というのは「知識が豊富だ」とか「頭の回転が速い」という意味だ。

12) プラトン『ソクラテスの弁明』21B-C.

13) プラトン『ソクラテスの弁明』21C-22D.

14) プラトン『ソクラテスの弁明』21C.

15) プラトン『ソクラテスの弁明』21D.

これに対し、ここでは「無知を自覚している」ということだから、特殊な意味での「賢さ」だね。しかし、このように解釈することによって、この神託はソクラテスにとって謎でなくなったんだ。

Q氏 しかし、なぜアポロン神はそんなことをソクラテスに伝えたんだろう。

P氏 その点についてもソクラテスは解釈した。「本当の知は神だけが持っている。人間が持っている知はたいしたことはない。ソクラテスはそのことを自覚している。だから、ソクラテスよ。他の人間たちにもこのことを自覚させろ。それがお前の使命だ。」アポロン神は自分にこのように命じている。ソクラテスはこう解釈した¹⁶⁾。

Q氏 「神から使命を与えられた」と解釈したのか。

P氏 そうなんだ。ソクラテスは、この神託事件のあと、仕事をやめて、毎日人々と対話するようになった。対話の目的は「人々に自分の無知を自覚させること」だ。死ぬまで約30年間対話を続けたんだ。

Q氏 その対話って、相手からしたら不愉快だろうね。自分の無知を自覚させられるわけだから。

P氏 ソクラテスは70歳のとき（前399年）に死刑を宣告されて死んだ。ペロポネソス戦争（前431年～前404年）の後の混乱した政治状況の中で死刑判決を受けた¹⁷⁾ んだけど、長年の対話のせいでソクラテスを憎んだ人々がいた¹⁸⁾ ことも死刑判決がくだされた原因のひとつだと思うよ。

3 美や善に関する知識

Q氏 しかし、Pさんの話を聞いていて、一つ気になることがある。「賢い」という評判を持つ政治家と話している内にソクラテスは「この政治家は、評判と違って、賢くないぞ」と思ったんだよね。

P氏 そうだよ。

Q氏 でも、ソクラテスがなぜそう思ったのかよく分からないな。だって、政治家は、「知識が豊富だ」とか「頭の回転が速い」という普通の意味での賢さなら持っているんじゃないかな。たとえば、いろいろな国の人口や産業についてよく知っているだろうし、人間の心理についても知らないと、人々を動かすことはできないだろう。それに、頭の回転が速くないと、他の政治家との論争に勝てない。「賢い」と評判になる政治家は、やっぱりそれだけのことはあるんじゃないかな。それなのに、なぜソクラテスは「この政治家は賢くない」と思ったんだろう。

P氏 ソクラテスは「この政治家も私も美や善について何も知らない」と言っている¹⁹⁾。人口や産業、人間の心理というのは、事実だよ。それに対して美や善というのは価値だ。

Q氏 つまり、ソクラテスの言う「賢い」というのは、「事実ではなく、価値についてよく知っている」

¹⁶⁾ プラトン『ソクラテスの弁明』23A-B, 28E, 30E。

¹⁷⁾ 前404年にペロポネソス戦争でアテナイはスパルタに敗れ、スパルタ軍の支援を受けた独裁政権（三十人政権）がアテナイに生まれた。その翌年、亡命していた民主派が独裁政権を倒し、アテナイに民主制が復活したが、ソクラテスは民主制の敵とみなされ前399年に死刑になった。加来（2004）p. 64は、「彼の死は一種の政治的な死、あるいは少なくとも、政治のなかでの死であって、彼は政治的混乱のなかで非業の死を遂げたのだともみられる」と言う。

¹⁸⁾ プラトン『ソクラテスの弁明』21D-Eによると、問答の結果「その当人と他の多くの人々に憎まれてしまった」とソクラテス自身が述べている。

¹⁹⁾ プラトン『ソクラテスの弁明』21D。

という意味か。

P氏 そのとおり。事実に関してたくさん知識を持っても、私利私欲のために知識を悪用する人もいる。政治家には、善い目的のために知識を使って欲しい。だから、政治家は事実だけでなく価値についてよく知っていることが必要だ。ソクラテスはこう考えたんだね²⁰⁾。

Q氏 う～ん、でも、美や善についても、「何も知らない」というのはありえないと思うよ。たとえば、「約束を守る」「嘘をつかない」「困っている人を助ける」ということが善いことだってことは皆知っているんじゃないかな。

P氏 なるほど。「約束を守ることは善いことだ」とQさんは思うんだね。

Q氏 え、善いことじゃないのか。

P氏 たとえば、Qさんが友達と待ち合わせしたとしよう。これもひとつの約束だよな。

Q氏 そうだよ。だから、遅刻しないように行くことが善いことだ。

P氏 じゃあ、Qさんが待ち合わせ場所に向かって急いでいるときに、前を歩いていた老人が突然倒れて苦しみだしたとしよう。その老人を助けたら確実に待ち合わせに遅刻する。だから、助けずに通過ぎて友達との約束を守るのが善いことだね²¹⁾。

Q氏 ちょっと待てよ。その場合は別だ。その老人に声をかけてみて、反応がなかったら、周りの人に大声で「誰か手を貸してください。お年寄りが倒れてます」と呼びかけるよ。もし周りに人がいなかったら、すぐに救急車を呼ぶ。

P氏 Qさんはえらいな。

Q氏 友達との待ち合わせより人命救助を優先する方が善いことだと思うよ。ほとんどの人はこう思うんじゃないかな。

P氏 すると「約束を守ることがいつも善いとは限らない」ということだね。

Q氏 まあ、そうなるね。例外はある。

P氏 他にはどんな例外があると思う？

Q氏 えーと、そうだね。報酬のいい仕事を始めたけど、それが実は特殊詐欺の手伝いだと気づいた場合、雇い主との約束は破っていいだろうね。

P氏 その場合は、約束を守る方がかえって悪いということだね。結局、「約束を守ることは善い」と手放しでは言えないということになる。

Q氏 確かに例外はいろいろあるだろうね。

P氏 そして、一番の問題は、すべての例外をあらかじめ列挙するのは無理だということだ。

Q氏 ある程度のパターン化はできるだろうけど、100パーセントは無理かもしれない。

²⁰⁾ プラトン『ソクラテスの弁明』30Bによれば、金銭・評判・名誉に関して、ソクラテスは「金銭から徳は生じないが、徳にもとづいて、金銭などは、個人的にも公共的にも、人間にとって善きものとなる」と言っていた。これは「徳」という価値次第で、金銭・評判・名誉は善にも悪にもなる」という主張である。

²¹⁾ ソクラテスはしばしば、問答において「相手の答えが当てはまらない事例をあげて反論する」という方法をとった。「友人との約束」というこの例は、ソクラテスの方法にならって筆者が考案した。

P氏 しかし、例外の列挙が無理だとしても、もし善の定義（「善とは何であるか」）を知っているなら、その定義に当てはまる行為は無条件に「善い行為」であり、当てはまらない行為は無条件に「善くない行為」だと決定できる。たとえば「偶数」の定義は「2で割り切れる数」だから、具体的な数（たとえば、2024）が偶数であるかどうかは、2で割ってみれば決定できる。同じように、具体的な行為（たとえば、倒れた老人を助けるために友達との待ち合わせに遅刻すること）が善い行為であるかどうかは、「善」の定義に当てはまるかどうかで決定できる。

Q氏 「善」の定義なんてあるのか。

P氏 Qさんはさっき「待ち合わせに遅刻したとしても、倒れた老人を助けることは善いことだ」とか「特殊詐欺の手伝いだと気づいた場合、雇い主との約束を破ることは善いことだ」と言ったよね。

Q氏 言った。

P氏 両方の場合で「善い」という同じ言葉を使っただけだ。つまり、両方の場合に共通な何かを「善い」と呼んだわけだ²²⁾。それなら、「善い」という言葉の意味をQさんは知っているんじゃないかな。

Q氏 まあ、知っていると思うよ。

P氏 「善い」の意味を知っているということは、善の定義を知っているってことじゃないかな。では、善の定義を言ってもらえるかい。

Q氏 「善の定義」か。う～ん、言葉で言うのは難しいな。

P氏 しかし、言えないってことは、善の定義を知っているつもりだったけど、本当は知らなかったということになるんじゃないかな²³⁾。

Q氏 う～ん、なんか、Pさんにうまくはめられたみたいなのがする。

P氏 いやいや、ちょっとソクラテスのまねをしてみたんだ。ソクラテスとの対話によって相手は何も言えない状態になったから、ソクラテスは「しびれエイ」と呼ばれたんだよ²⁴⁾。しびれエイという海の生き物は電気ショックで獲物を動けなくしてしまうからね。

Q氏 そうやって、ソクラテス是对話相手に無知を自覚させようとしたんだね。

P氏 そうだよ。結局、ソクラテスの言う「知」は2つの特徴を持っている。ひとつは、善や美すなわち価値に関する知だということ。もうひとつは、定義を知っているということだ²⁵⁾。「価値に関する」

²²⁾ プラトン『ラケス』191Eにおいて、ソクラテスは「勇氣とは何であるか」を探究する際、「勇氣あるふるまい」のさまざまな例をあげる対話相手に対して、「それらすべてが同一のもの〔勇氣〕であるのは、勇氣が何であるからなのか」と問うている。つまり、多様な具体例すべてが「勇氣」という同一の名で呼ばれるのは、それらに共通の何かがあるはずだが、それは何なのか、と「勇氣」の定義をソクラテスは問うている。同様に、プラトン『メノン』75Aにおいて、ソクラテスは「徳とは何であるか」を探究する際、「僕は君の挙げるようないろいろな事例のすべてに共通する同一のものを求めているのだ」と言う。

²³⁾ プラトン『ラケス』190Cにおいて、ソクラテスは「私たちが知っているものについては、私たちは、それが何であるのか〔その定義〕を言うこともできるはずだ」と言う。「言表可能性が〔知〕の必要条件である」という前提をソクラテスは持っている。

²⁴⁾ プラトン『メノン』80A-B。

²⁵⁾ アリストテレス『形而上学』A巻（第1巻）第6章987b1-4やM巻（第13巻）第4章1078b17-30によれば、ソクラテスは「倫理的な徳について普遍的定義を求めることに努めた」人物だった。アリストテレス（Aristotelēs、前384～前322年、ギリシア）はプラトンの弟子であり、ギリシアの隣国マケドニアの出身である。学園リュケイオン

と「定義を知っている」というふたつの条件を満たす知をソクラテス自身も対話相手も持っていない、だから「無知だ」とソクラテスは言っているんだ。

Q氏 う～ん、そういう条件を満たさなければ「無知だ」というのは、ちょっと厳しすぎるような気がする。少しくらい例外があっても、おおそ分かっていればいいんじゃないかな。

P氏 ソクラテスが「知」にここまで厳しい条件を課したのは理由があるんだ²⁶⁾。

Q氏 どんな理由だ？

4 相対主義との対決

P氏 その理由とは相対主義との対決だ。相対主義は当時のアテナイで流行していた「価値の基準は社会や個人に相対的だ」という思想だ。つまり、「何が『善い』かは、社会ごとに異なり、さらには、個人ごとに異なる」という思想だ²⁷⁾。

Q氏 その思想は正しいと思うよ。同じ行為が一つの国で「善い」とされ、他の国では「悪い」とされることはあるからね。たとえば、安楽死はオランダでは合法だけど、日本では違法だと聞いたことがあるよ。

P氏 すると、「価値に絶対的な規準はない」ということになるのかな。

Q氏 う～ん、安楽死のように判断が分かれるケースもあるけど、「人を殺すことは善くない」という原則はどの国でも認められているんじゃないかな。原則は共通で、例外をどこまで認めるかに関して社会や個人の考えが異なるということだと思う。

P氏 すると「原則に関しては絶対的な規準がある」というのがQさんの考えなのかな。

Q氏 そうだ。

P氏 それならQさんは相対主義者ではないよ。相対主義者は絶対的な規準を一切認めないからね。

Q氏 じゃあ、相対主義者は「殺人が善いか悪いかは社会や個人ごとに異なる」と主張するのかい。

P氏 そうだよ。相対主義者ならQさんに向かって、「『殺人は悪い』が原則だというのは君の考えだ。私なら、『殺人の善悪は人による。ある人々にとって善い殺人が、他の人々にとっては悪い殺人である』

を創設し、哲学だけでなく、論理学・倫理学・政治学・経済学・詩学・生物学・物理学など西洋の学問の源流を作った。

²⁶⁾ 「知にソクラテスやプラトンのような厳しい条件を求めるべきではない」という批判もありうる。たとえば、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第1巻第3章 1094b11-27 や第7章 1098a26-33 において、知を理論知（数学など）と実践知（道徳など）に分け、「理論知には必然性（例外なしに必ず成り立つ）を求めてよいが、実践知には蓋然性（例外はあるがたいいて成り立つ）で満足すべきだ」と言う。「なぜソクラテスやプラトンは知にこのような厳しい条件を求めたのか」は解釈上の問題であり、本論文は「相対主義に対抗するためだった」という答えを（次の第4節で）提案する。

²⁷⁾ 納富（2008）pp. 280-281 によると、当時の代表的ソフィストであるプロタゴラス（Prōtagorās, 前490頃～前415年頃、ギリシア）の名著『真理』の冒頭に「人間はすべての物事の尺度である」と記されており、「事実相対主義」「価値相対主義」「個人相対主義」「社会相対主義」のいずれをも含む包括的なたちで相対主義の原則が示されている。真偽の基準の相対性を主張するのが「事実相対主義」であり、価値（善悪や美醜）の基準の相対性を主張するのが「価値相対主義」である。また、基準を個人ごとに相対化するのが「個人相対主義」であり、社会ごとに相対化するのが「社会相対主義」である。本論文は「ソクラテスやプラトンが最も敵視したのは個人的価値相対主義である」という解釈を提案する。

と考える」と言うだろう。

Q氏 「ある人々にとって善い殺人」なんてあるのかね。

P氏 その相対主義者は「戦争で敵を殺すのは味方の国の人々にとって『善い』ことだ。その証拠に、たくさんの敵を殺した兵士は『英雄』扱いされる。しかし、殺される側の国の人々にとっては『悪い』ことだ」と言うだろうね。

Q氏 う～ん、戦争か。僕は敵であっても人を殺すのは嫌だね。

P氏 「嫌だ」という感情が善悪の基準になるなら、感情は人それぞれだから、善悪も人それぞれだ。やっぱり相対主義が正しい。相対主義者はこう言うかもしれない。

Q氏 別に「感情が善悪の基準になる」とは思っていないよ。う～ん、では、「強盗殺人」はどうかな。相対主義者は「強盗殺人の善悪は人による」と言うのかい。

P氏 そうだよ。極端な相対主義者だと「強盗殺人は私にとって善いことだ」と言うよ。

Q氏 えーっ、どういうことだ。強盗殺人は明らかに犯罪だよ。

P氏 では、私が極端な相対主義者になりきるから、ふたりに対話してみよう²⁸⁾。

Q氏 分かった。やってみるよ。

P氏 では、始めよう。

Q氏 強盗殺人は犯罪だから悪いことだ。

P氏 法律に違反するということだね。

Q氏 そうだ。

P氏 法律というのは誰かが作ったものだ。私がそれに従うかどうかは私が自分で決める。

Q氏 法律は誰かが従うべきものだろう。

P氏 それは君の考えだ。私は自分の利益になるときは法律に従うが、利益にならないときは従わない。

Q氏 法律は誰かが作ったのではなくて、選挙で選ばれた議員が作ったものだ。つまり、社会の皆の考えが法律になるんだよ。だからこそ、皆が法律に従わなければならないんだ。

P氏 それは君の考えだ。私が皆に従うかどうかは私が決める。そもそも私がどう行為するかは私が決める。なぜなら、それは他人の行為でなく私の行為だからだ。

Q氏 強盗殺人なんかしたら、刑務所に入れられるよ。それでもいいのか。

P氏 私はそんなへまはしない。ばれないようにするんだよ²⁹⁾。

Q氏 でも、君だって、他人から強盗殺人をされたら嫌だろう。

²⁸⁾ 殺人をめぐる相対主義者との対話は、相対主義の特徴を明らかにするために筆者が考案したものである。ここで想定しているのは、相対主義の極端な形態である個人的価値相対主義（善悪の基準を各個人に相対化する考え方）である。

²⁹⁾ プラトン『国家』第2巻第3章359D-360Dで「ギュゲスの指輪」という思考実験が描かれる。この指輪によって人は自分の姿を他人から見えなくすることができ、誰にもばれずに私利私欲を満たすことができる。「もしこの指輪を手に入れたなら、人間はどうふるまうだろうか」という思考実験である。

P 氏 ああ、嫌だ。

Q 氏 だったら、他人に対して強盗殺人するべきじゃない。

P 氏 なぜ？

Q 氏 他人からされて嫌なことは他人に対してやるべきではないからだよ³⁰⁾。

P 氏 それは君の考えだ。私はそんな考えは持っていない。

Q 氏 ということは、他人からされて嫌なことを君は他人に対してするのか。

P 氏 それが私の利益になる場合はそうするよ。

Q 氏 皆が君みたいな利己的な考え方をしたら、社会は成り立たなくなる。

P 氏 私は社会より自分を優先する。この世は弱肉強食なんだよ。——Q さん、このあたりにしておこうか。

Q 氏 相対主義者って、「ああ言えばこう言う」という感じで、話が全然通じないと感じたよ。

P 氏 そうだね。相対主義者は、何を言われても「それは君の考えだ」と言い返すからね。価値について話すための共通の土俵が壊される感じだね。

Q 氏 しかし、あんな極端な相対主義者って実際にいたのかな。

P 氏 プラトンが書いた『ゴルギアス』という対話篇の中にカリクレスという人物が登場するんだけど、カリクレスはこう言うんだ。「欲望はできるだけ大きくして、できるだけ満足させるべきだ。一般大衆はそうするだけの能力がないから、そんなふうにする人を非難する³¹⁾」。つまり、誰もが本音では「法律や道徳より自分の利益を優先したい」と思っているけれど、それを実行するだけの能力がないから、法律や道徳に従っているのだ。これがカリクレスの考えだ。

Q 氏 つまり、「みんな、本当は相対主義者になりたいけど、なれないから相対主義者を非難するのだ」とカリクレスは言ってるんだね。

P 氏 そうだよ。また、プラトンの『国家』という対話篇に登場するトラシュマコスという人物は「法律というのは、支配階級が自分たちの利益になるように作ったものだ」と言う³²⁾。つまり、「どんな人が支配階級になるかによって法律の内容はいくらでも変わる」という主張だ。

Q 氏 「だから、自分が法律に従わなければならない理由はない」とトラシュマコスは主張したいわけだな。

P 氏 そのとおりだよ。カリクレスやトラシュマコスのこれらの発言はプラトンの創作かもしれない。しかし、相対主義を徹底させると、法律や道徳が根拠を失って社会が崩壊し弱肉強食の世界が出現する。このようにソクラテスやプラトンは考えたんだ³³⁾。

30) これは伝統的に「黄金律」と呼ばれてきた考え方である。黄金律については伊佐敷（2024）を参照されたい。

31) プラトン『ゴルギアス』492A.

32) プラトン『国家』第1巻第12章338E.

33) プラトンはソクラテスの死後、政治家志望から哲学者へ転身したが、政治への関心は生涯失わなかった。そのことは、生涯に3度シチリア島に渡り、現地の都市国家シラクサで理想の政治を実現しようと活動した（プラトン『第七書簡』）点にも表れているし、彼の主著である『国家』のタイトルにも表れている。この主著は理想の国家のあり方

Q氏 だから、相対主義に対抗するために価値の定義をソクラテスは求めたんだね。

P氏 そのとおりだ。もし「善」に定義があるなら、何が善い行為であるかは定義によって自動的に決まる。そうなれば、相対主義者の出る幕は無くなる。このような厳しい条件を満たす知を求めることをプラトンは「知への愛（フィロソフィア）」と呼んだんだ。

Q氏 ソクラテスの対話はそのような知を求める活動だと弟子のプラトンは捉えたんだね³⁴⁾。

P氏 そうだよ。ソクラテスやプラトンは、「みんなが信じているから」（常識）とか「昔からそうだから」（伝統）とか「なんとなくそんな気がするから」（思い込み）では「知」と呼べないと考えているんだ。常識・伝統・思い込みでは相対主義に対抗できない。しかし、定義なら相対主義に対抗でき、社会や道徳の崩壊を防げる。これがソクラテスやプラトンの考えだよ。

Q氏 ちょっと待ってくれ。一つ疑問がある。ソクラテスがアポロン神から与えられた使命は「人々に自分の無知を自覚させること」だったよね。そして、「無知」とは「本当の知は神だけが持っている。人間が持っている知はたいしたことはない」ということだった。しかし、ソクラテスの対話が「知への愛」であるなら、この愛は決して報われないのではないだろうか。なぜなら、ソクラテスによれば、本当の知は神だけが持っているのだから。

P氏 すばらしく鋭い指摘だね。しかし、プラトンは「知への愛は報われうる」と考えているよ。

Q氏 「神の持っている知を人間も持てる」とプラトンは考えているのかな。

P氏 少なくとも、無知から抜け出して、神の知に近づくことは可能だとプラトンは考えている。

Q氏 ということは、「価値の定義が可能だ」とプラトンは考えているのか。

P氏 そうだよ。プラトンは実際に定義してみせた。それがプラトンのアイデア論だ。アイデア論とは、ソクラテスが課した厳しい条件を満たす知を見つけようとする試みなんだ。このように、ソクラテスやプラトンの試みは「相対主義に対抗する」という動機にもとづいていた³⁵⁾。そして、プラトンによれば、相対主義は誰の心の中にも潜んでいる。きっと現代の私たちの心にも潜んでいるだろう。だから、相対主義は時代を越えた課題なんだ³⁶⁾。

を論じたものである。

34) ソクラテスが生前に一文書も書かなかったため、ソクラテスの活動の実態や目的については、彼について他人が書いた文章にもとづいて推測するしかない。実際、プラトンと同世代のクセノフォン(Xenophōn 前430頃～前355年頃)が『ソクラテスの思い出』の中で描くソクラテスは「私は何も知らない」と言わず、若者たちに向かって積極的に徳を教える人物である。このように、プラトンとクセノフォンの伝えるソクラテス像は異なる。しかし、本論文は、プラトン哲学の核心を理解するために、あくまでも「プラトンの目に映ったソクラテス」を対象とする。

35) 本論文は、ソクラテスとプラトンの哲学の核心を「プラトンのアイデア論はソクラテスが課した知の厳しい条件に応える試みであり、そして、知のこのような厳しい条件は相対主義に対抗するためだった」と解釈する。

36) 筆者の考えでは、ここにプラトン哲学の現代性がある。

Ⅱ アイデア論者プラトン

1 数学的アイデア

P氏 ソクラテスが紀元前 399 年に死刑になったとき、プラトンは 28 歳だった。ソクラテスと出会ってから 8 年後のことだった。

Q氏 ということは、プラトンは 20 歳のときにソクラテスと出会ったんだね³⁷⁾。

P氏 そうなんだ。出会ったころソクラテスは 62 歳だった。神託事件から既に 20 年ほど経っており、人々との対話を続けていたソクラテスは都市国家アテナイの有名な人になっていた³⁸⁾。プラトンはソクラテスを尊敬し、ソクラテスが人々と対話するのをそばで見るようになったんだ³⁹⁾。

Q氏 ソクラテスが死刑になったのは、プラトンにとってショックだっただろうね。

P氏 そうだったよ。プラトンの先祖にはアテナイの政治家が何人もいる⁴⁰⁾。プラトン自身もいつかアテナイの政治を担うつもりでいた⁴¹⁾。しかし、彼の愛するアテナイは彼の尊敬するソクラテスを死刑にしてしまった。ソクラテスの死後、プラトンは「ソクラテス先生がやっていたことは、いったい何だったんだろう」と考え始めたんだ。

Q氏 それまで分かってなかったのか。

P氏 ソクラテスが生きている間は分かっていなかった。ソクラテスの死後、プラトンは考え続け、やがて「ソクラテス先生のやっていたことは、知を愛し求めること（フィロソフィア）だったんだ」という結論に到達した⁴²⁾。もちろん、この「知」は、あの 2 つの条件（「価値に関する」と「定義を知っている」）を満たす知だ。そして、プラトンは自分もソクラテスと同じことをやろうと心に決めた。

Q氏 プラトンもフィロソフィアを始めたんだね。

P氏 プラトンは 80 歳まで生きたけど、あの 2 つの条件を満たす知を生涯求め続けたんだ。その試みが彼のアイデア論だ。

Q氏 「アイデア」って言葉は聞いたことがあるけど、中身はよく分からないな。「アイデア」って何なんだ？

P氏 プラトンが作った学園アカデメイアの入り口に「幾何学を知らない者は入ってはいけない」と書いてあったと伝えられている⁴³⁾。

37) ソクラテスと出会ったときのプラトンの年齢はディオゲネス・ラエルティオス（1984）pp. 252-253 による。

38) 荻野（2003）pp. 15-18 によれば、紀元前 423 年（ソクラテス 46 歳）に喜劇作家アリストファネスによって、ソクラテスを主人公とする喜劇『雲』がアテナイで上演されており、ソクラテスは既に 40 代で喜劇の材料になるような有名な人としてアテナイの人々に知られていた。

39) プラトン『パイドン』第 67 章 118A において、ソクラテスは「私たちの知りえた当代の人々のうちで最も優れた人、とりわけ知恵と正義において最も優れた人」とであると描かれている。

40) ディオゲネス・ラエルティオス（1984）p. 249。

41) プラトン『第七書簡』324B-C。

42) 「デルフォイの神託事件」や「ソクラテスの裁判」を描く『ソクラテスの弁明』はプラトンの初期の著作であるが、納富（2012）p. 212 によれば、ソクラテスの死の 6～10 年後に執筆された。

43) 廣川（1980）pp. 103-104 によると、このエピソードは後世の作り話だと考えられるが、アカデメイアで数学教育

Q氏 数学が学園の入試科目だったんだね。

P氏 アカデメイアに入学試験があったかどうかはよく分からないけど、プラトンが数学を重視していたのは間違いない⁴⁴⁾。

Q氏 数学とアイデアが関係あるのか。

P氏 あるよ。プラトンは「数学は、純粹の数そのものについて論じるのであって、眼で見たり手で触れたりできる物体の形をとる数について論じるのではない」と言っている⁴⁵⁾。

Q氏 「数そのもの」と「物体の形をとる数」はどう違うんだ？

P氏 物体の形をとる数というのは、たとえば、「ここにリンゴが2個ある」とか「ここにリンゴが1個とバナナが1本ある」というような場合の「2個」や「1本」のことだよ。

Q氏 その場合の「2個」や「1本」は「数そのもの」ではないということか。

P氏 そのとおり。1個のリンゴを切ってふたつに分けることができる。でも、数そのものとしての1をふたつに分けることはできない。

Q氏 ん？ 1をふたつに分けたら、2分の1という分数になるんじゃないのか。

P氏 いやいや、「 $1 \div 2$ 」という割り算は「数そのものとしての1」と「数そのものとしての2」の比を求めているのであって、「数そのものとしての1」を分けているわけじゃないよ。というのは、1個のリンゴをふたつに切ったら、元の1個のリンゴは無くなって、半分の大きさのりんごがふたつできるけど、「 $1 \div 2$ 」という割り算をしたからといって、「1」が無くなるわけじゃないからね⁴⁶⁾。

Q氏 なるほどね。

P氏 そして、プラトンに言わせれば、物体の形をとる数が眼で見たり手で触れたりできるのに対し、数そのものは目で見たり手で触れたりすることはできない。

Q氏 でも、見たり触れたりできないなら、「数そのもの」についてどうやって知ることができるんだ？

P氏 知性の働きによって、つまり、考えることによって知るんだ。他方、目で見たり手で触れたりすることは感覚の働きだ。プラトンは知性と感覚を峻別するんだ⁴⁷⁾。

Q氏 でも、学園アカデメイアの入り口に「幾何学を知らない者は入ってはいけない」と書いてあったそうだが、幾何学が扱う図形は目で見えるものだよね。数は知性の対象かもしれないけど、図

が重視されたことは事実である。

⁴⁴⁾ 廣川（1980）pp. 103-104. プラトン『国家』第7巻第6章～第12章において、アイデアの知に接近するための予備学として数学・天文学・音楽理論があげられ、続く第13章～14章において、これらの予備学を修めたあと、哲学的対話によって本格的にアイデアの知を獲得するとされている。（天文学や音楽理論も数学的な学問であると考えられている。）

⁴⁵⁾ プラトン『国家』第7巻第8章 525D.

⁴⁶⁾ プラトン『国家』第7巻第8章 525E.

⁴⁷⁾ プラトン『国家』第7巻第8章 526Aによれば、「数そのもの」は「ただ思惟によって考えられることができるだけ」である。

形は感覚の対象なんじゃないかな。

P 氏 すばらしく鋭い質問だね。しかし、プラトンは四角形そのものと図に描かれた四角形を区別している。そして、幾何学が論じるのは四角形そのものであり、図に描かれた四角形は補助的に使われるだけだと言っている⁴⁸⁾。

Q 氏 すると、図に描かれた四角形は感覚の対象だけど、四角形そのものは知性の対象だとプラトンは主張しているのか。

P 氏 そのとおり。

Q 氏 「図形が知性の対象だ」というのはよく分からないな。

P 氏 四角形には 4 つの角があるけど、それら 4 つの角の角度の合計はいくらになるかな。

Q 氏 え〜と、四角形に対角線を 1 本引けばふたつの三角形に分かれる。そして、三角形の内角の和は 180 度だから、その 2 倍の 360 度だ。

P 氏 そうだね。ところで、「三角形の内角の和が 180 度だ」というのはどんな三角形でもそうなのかな。

Q 氏 うん、学校でそう習った。

P 氏 「習ったから」というのは理由になるかな。天動説（「地球は宇宙の中心にあって静止しており、太陽や星々が地球の周りを動いている」という説）が信じられていた時代には、みんな「地球は宇宙の中心で静止している」と習っていたよ。

Q 氏 え〜と、実際に三角形を描いてみて、分度器で測れば確かめることができる。

P 氏 「三角形」と言ってもいろいろある。正三角形、二等辺三角形、直角三角形、鋭角三角形、鈍角三角形。Q さんはすべての三角形について測ったことがあるのかな。

Q 氏 ないよ。と言うか、三角形の形は無数にあるから、全部の三角形を測ることは不可能だ。

P 氏 そうだね。いくつかの三角形について分度器で測ってみることはできるけど、だからと言って、他の三角形についても「180 度」であるかは分からないよね。

Q 氏 分度器で測るのではなくて、証明があったと思う。

P 氏 そうだね。証明があるね。三角形の底辺と平行な直線を頂点から引く。そして、「平行線の錯角は等しい」という性質を使えば証明できる。

Q 氏 そうだった。思い出した。

P 氏 この証明をするとき、特定の形の三角形の図を描くことがあるけど、その特定の形の三角形だけでなく、どんな形の三角形にもこの証明は当てはまる。

Q 氏 もちろんだよ。そうでなければ、証明にならない。

P 氏 このとき、図に描かれた三角形は補助的に使われているだけであり、「内角の和が 180 度」ということが証明されたのは三角形そのものについてだ、というのがプラトンの言いたいことだよ。

⁴⁸⁾ プラトン『国家』第 6 巻第 20 章 510D。

Q氏 つまり、証明された $\triangle$ そのものは感覚の対象でなく、知性の対象だとプラトンは言いたいわけだね。

P氏 そのとおり。すべての $\triangle$ を眼で見ることにはできないけれど、それら全部に証明が当てはまるということを経験で考えて納得するわけだ。そして、「経験で考える」というのは知性の働きだ⁴⁹⁾。

Q氏 「図形が知性の対象だ」ということが、なんとなく分かってきた。

P氏 もっと言えば、図に描かれた $\triangle$ を分度器で測る場合だけど、厳密には180度にならない。黒板や紙に小さなでこぼこがあるから、描かれた直線は拡大するとギザギザだよ。だから、角度を正確に測ることはそもそも不可能だ。

Q氏 確かに、顕微鏡で拡大したら、かなりギザギザだろうね。

P氏 しかし、角度を正確に測れないからといって、「 $\triangle$ の内角の和は180度だ」が間違いだということになるだろうか。

Q氏 ならないと思うよ。

P氏 なぜ？

Q氏 さっきの証明は、ギザギザのない理想的にまっすぐな直線からできている $\triangle$ について考えているから。

P氏 そうだね。「理想的にまっすぐな直線」というのは、描くことは不可能だけど、考えることは可能だ。つまり、「理想的にまっすぐな直線」は感覚の対象ではなく、知性の対象だ。それが直線そのものなんだ。

Q氏 図に描かれた $\triangle$ と $\triangle$ そのものが違うように、図に描かれた直線と直線そのものは違うということか⁵⁰⁾。

P氏 そのとおり。そして、黒板に描かれた $\triangle$ が黒板消しを使って消し去ることができるのに対して、 $\triangle$ そのものは絶対に消滅しない。プラトンはこう主張している⁵¹⁾。

Q氏 世界中にある $\triangle$ の形をしたものが全部無くなったとしても $\triangle$ そのものは消滅しないということか。

P氏 描かれた $\triangle$ の図、 $\triangle$ 屋根、 $\triangle$ おにぎり、 $\triangle$ の顔の人、これらの物がすべて無くなったとしても、 $\triangle$ そのものは無くならない。図や屋根やおにぎりは感覚の対象であって、もともと、厳密な $\triangle$ ではない。だから、知性対象である $\triangle$ そのものが、それらの $\triangle$ の形をしたものと運命をともにする必然性はない。

Q氏 う～ん。必然性はないけど、運命をともにする可能性はあってもいいんじゃないかな。

P氏 では、世界にある $\triangle$ の形をしたものが全部無くなった場合、「 $\triangle$ の内角の和は180度だ」

49) プラトン『国家』第6巻第20章511Aによれば、「四角形そのもの」は「思考によってしか見ることができない」。

50) プラトン『国家』第6巻第20章510Dにおいて、「図形に描かれる対角線」と「対角線そのもの」が区別されている。

51) プラトン『国家』第7巻第9章527Bによれば、「幾何学が知ろうとするのは、常に存在するものであって、時によって生じたり滅びたりする特定のものではない」。

という数学的な定理は成り立たなくなると思ukai。

Q氏 う～ん、それは変だな。そうだ、その場合、厳密な三角形は人間の心の中に存在し続けるのではないかな。

P氏 では、逆のケースを考えてみよう。三角の形をしたものは世界に存在しているんだけど、人類が絶滅して、三角形のことを考える人がひとりもいなくなった場合、(つまり、心というものが存在しなくなった場合)だ。この場合、「三角形の内角の和は 180 度だ」という数学的定理は消えてなくなることかな。あるいは、人類が発生する前の原始時代にこの定理は成り立っていなかったんだろうか。

Q氏 う～ん、それも変だね。

P氏 プラトンは、知性の対象である「三角形そのもの」は、感覚の対象である「図に描かれた三角形」や「三角の形をした物体」とは別であるのはもちろん、人間からも独立だと考えたんだ。

Q氏 「人間から独立」というのはどういう意味？

P氏 「人間が考えようが考えまいが、三角形そのものは存在する」さらには「人間が存在しようが存在しまいが、三角形そのものは存在する」という意味だよ。

Q氏 でも、「人間から独立」というのがそういう意味だとすると、世界にある三角の形をした物体(たとえば、三角の形をした山)も人間から独立だということにならないか。

P氏 なるよ。でも、それらの物体は感覚の対象であって、知性の対象ではない。

Q氏 なるほど。人間から独立であり、かつ、(感覚の対象でなく)知性の対象である。これが三角形そのものの特徴か。

P氏 そのとおり。そして、感覚の対象としての三角形(図に描かれた三角形、三角の形をした物体)が厳密な三角形でないのに対し、知性の対象としての三角形そのものは厳密な三角形だ。プラトンは、このような特徴を持つ三角形そのものを「三角形のイデア」と呼ぶんだ⁵²⁾。

Q氏 そうすると、イデアの特徴は、①知性の対象である、②厳密に正確である、③消滅しない、④人間から独立であるの4点になるね。

P氏 そのとおりだよ。すばらしい整理だ！

Q氏 イデア論というのは数学に関する理論なんだね。

P氏 現代の多くの数学者も数学の研究対象はそれら①～④の性質を持つと考えていると思う。

Q氏 現代の数学者はプラトンのイデア論に賛成しているんだね。

P氏 自分のことを「イデア論者だ」と自覚している数学者は少ない。でも、実質的にはプラトンのイデア論と同じ考え方をしていると思うよ⁵³⁾。

52) プラトンは「イデア (ideā)」「エイドス (eidos)」「○○そのもの (アウト・ト○○ auto to ***)」「まさに○○であるもの (アウト・ホ・エスティン○○ auto ho estin ***)」などのさまざまな言い方をしているが、これらの表現が現れる文脈から考えると、これらは同義である。この点に関してプラトン研究者の間に争いはない。なお、「三角形のイデア」という言い方はプラトンの著作に現れないが、プラトン『国家』第6巻第20章510Dに「四角形そのもの」「対角線そのもの」、プラトン『第七書簡』342Cに「円そのもの」という言い方が現れている。

53) たとえば、数学を厳密に基礎づけるために記号論理学を創ったフレーゲ (Gottlob Frege, 1848 ~ 1925 年, ドイツ)

Q氏 ヘえ、プラトンが数学と関係あるなんて知らなかったよ。

2 意味としてのアイデア

P氏 誤解がないように言っておくけど、アイデア論は数学だけに限する理論ではないよ。プラトンは「あらゆる物体（火や水や人工物）にも、生き物にも、善や美や正義にも、アイデアが存在する」と主張しているからね⁵⁴⁾。

Q氏 なんにでもアイデアがありそうだね。

P氏 プラトンが「人工物」としてあげる例は「家具職人が机やベッドを作る場合」だ⁵⁵⁾。

Q氏 机やベッドを作るときにもアイデアが登場するのか。

P氏 机を作る職人は机のアイデアを心の眼で見つめながら机を作り、ベッドを作る職人はベッドのアイデアを心の眼で見つめながらベッドを作るんだ。

Q氏 「心の眼で見つめる」というのは「知性で考える」ということか。

P氏 そのとおり。そして、職人はさまざまな種類の机をそれぞれたくさん作るけど、どの場合も机のアイデアが手本になる。

Q氏 もし、ベッドのアイデアを手本にしたら、机ではなくベッドができあがってしまうね（笑）。

P氏 そうだね。そして、たくさんの個々の机が「机」という共通のひとつの名前で呼ばれるのは、それらの机がどれも机のアイデアを手本として作られたからだ。

Q氏 アイデアって手本なんだね。

P氏 机やベッドのような見たり触ったりできる個々の物は「感覚的個物」と呼ばれる。つまり、ひとつのアイデアに複数の感覚的個物が対応している。一方に、ひとつの完全な手本としてのアイデア（机のアイデア）があり、他方に、そのアイデアを手本にして作られた不完全な複数の感覚的個物（作られた個々の机）があるわけだ。

Q氏 作られた机は不完全なのか。そしたら、欠陥商品にならないか。

P氏 ベテランの職人さんは『完璧にできた』と思ったことは一度もねえな」とよく言うよ。

Q氏 ああ、聞いたことがある。では、人工物でない火や水にもアイデアがあるのか。

P氏 火や水のような自然物にもアイデアがある。火の場合だけど、ロウソクの火、たき火の火、火事の火など、いろいろな種類の火がある。さらに、同じ「ロウソクの火」であっても、複数のロウソクが別々の場所に置かれている場合もある。それらの火のどれもが「火」という同じ名前で呼ばれるのはなぜだと思う？

Q氏 う〜ん。「どれも火だから」では答えにならないか。

は、フレーゲ（1999）pp. 215-219において、ピタゴラスの定理によって表されている思想は、物質世界でも心的世界でもない第三の領域に属しており、無時間的に真であると主張している。フレーゲのこの主張はプラトンにちなんで「プラトニズム」と呼ばれている。

⁵⁴⁾ プラトン『第七書簡』342D。

⁵⁵⁾ プラトン『国家』第10巻第1章596B。

P氏 さっきの人工物の場合と同じように考えるんだ。一つ一つの机（感覚的個物）は机のアイデアを手本に作られたから「机」と呼ばれるわけだ。

Q氏 すると、あちこちにある感覚的個物としての火は、火のアイデアを手本に作られたから、「火」と呼ばれる。こうなるか。

P氏 そのとおり。

Q氏 でも、机を作ったのは職人たちだけど、火を作ったのは誰だ？

P氏 神様だ⁵⁶⁾。

Q氏 はあ、神様が火を作ったとは思えないな。火というのは物質が酸素と結合するときの化学反応だよ。

P氏 それなら、「アイデアを手本にして作った」というのを「アイデアという手本に似ている」と言い換えればいいよ。つまり、あちこちにある感覚的個物としての火は、火のアイデアという手本に似ているから「火」と呼ばれる⁵⁷⁾。こういうふうに考えるんだ。

Q氏 つまり、感覚的個物はそれと似ているアイデアと同じ名前で呼ばれるということか。

P氏 そうだよ。感覚的個物が複数あるのに対し、対応するアイデアはひとつだけだ。この「ひとつだけ」ということが大事な点だ。ひとつだけだから、それら複数の感覚的個物はひとつの同じ名前で呼ばれるんだ。机のような人工物の場合も、火のような自然物の場合も。

Q氏 それなら、火や水以外にも、複数のものが同じ名前で呼ばれる場合は常にアイデアが存在することにならないか。

P氏 いい質問だ。そうなるね。プラトン自身も「生き物のアイデア」に言及している⁵⁸⁾。たとえば、Qさんも私も人間だけど、ふたりとも人間のアイデアに似ているから同じ「人間」という名前で呼ばれる⁵⁹⁾。

Q氏 君も僕も男性だけど、男性のアイデアというものもあるのか。

P氏 プラトン自身ははっきり述べていないけど、そうなるだろうね。

Q氏 人間は哺乳動物だから、哺乳動物のアイデアもあるんだろうね。

P氏 そうなりそうだ。「哺乳動物」「人間」「男性」のように複数の個物に適用可能な名前は「一般名」と呼ばれ、「Qさん」みたいに一つの個物だけに適用される名前は「固有名」と呼ばれる。すると、どんな一般名にも、それに対応して、その名前のアイデアが存在する。こういうことになりそうだ

56) プラトン『ティマイオス』28A-Bで神は「宇宙の製作者（デーミウルゴス dêmiourgos）」と呼ばれている。

57) アイデアと個物の関係をプラトンはさまざまな言い方で述べている。すなわち、「個物はアイデアの似像（エイコン eikōn）である」「個物はアイデアを分有（メテケイン metechein）する」「個物はアイデアを共有（コイノーニア koinōnia）する」「アイデアが個物に臨在（パルーシア parousia）する」などである。これらの間の異同についてプラトン研究者の間で議論がある。たとえば、藤沢（1998）pp. 152-166 は「似像」と「分有」を区別することによって、アイデア論に対する「第三人間論」と呼ばれる批判（「個物とアイデアの両者を包括する更なるアイデアが無限に要請される」という批判）を回避できると主張する。

58) プラトン『第七書簡』342D。

59) ただし、『第七書簡』はプラトンの最晩年 74 歳のときに書かれたが、それより前に書かれた『パルメニデス』130C でプラトンは「人間や火や水のアイデアがあるかどうかについては迷った」と述べている。

ね⁶⁰⁾。

Q氏 ということは、アイデアってものすごくたくさんあるね。

P氏 そうだね。このように、アイデアは一般名の意味の説明として用いることができる。さっきの「数学的アイデア」に対して、これを「意味としてのアイデア」と呼ぶことができる。

Q氏 アイデアに2種類あるということか。

P氏 いや、そういうわけじゃない。数学的アイデアも「三角形」という一般名の説明になるから、意味としてのアイデアでもある。「数学的アイデア」と「意味としてのアイデア」は、アイデアの特徴をどう捉えるかの違いだ。

Q氏 今の話を聞いて、疑問がひとつ出てきた。

P氏 何だい？

Q氏 「三角形のアイデア」もひとつなのかい。

P氏 そうだよ。世界中のあらゆる三角の形をしたものは、ひとつしかない三角形のアイデアに似ているから「三角形」という同じ名前で呼ばれる。図に描かれた三角形はもちろん、三角屋根や三角おにぎりもね。ただし、似ている度合いはそれぞれ異なる。図に描かれた三角形の方が三角おにぎりよりも、三角形のアイデアに似ている度合いがずっと高い。

Q氏 三角形のアイデアはひとつではないような気がする。

P氏 なぜ？

Q氏 さっき四角形の内角の和を計算するとき、対角線を1本引いて、ふたつの三角形に分けたよね。それぞれの三角形の内角の和が180度だから、四角形の内角の和はその2倍の360度だった。

P氏 そうだったね。

Q氏 このふたつの三角形は知性の対象であり、厳密な三角形だった。

P氏 そうだね。描かれた三角形の図は感覚的個物であってあくまで補助手段だ。これに対し、内角の和が180度になるのは厳密な三角形、つまり三角形のアイデアだ。

Q氏 でも、三角形のアイデアはひとつしかないはずなのに、この四角形の中には三角形のアイデアがふたつあるよ！

P氏 おお、そうだね。Qさんは鋭いね。実は、この四角形の中にあるふたつの三角形は、①知性の対象である、②厳密に正確である、③消滅しない、④人間から独立であるというアイデアの4つの特徴を持っているんだけど、⑤ひとつだけであるという特徴は持っていないんだ⁶¹⁾。

Q氏 じゃあ、そのふたつの三角形はアイデアではないのか。

P氏 プラトンはそれら複数の三角形のことを「アイデア」から区別して「数学的对象」と呼ぶことがあ

⁶⁰⁾ プラトン『国家』第10巻第1章596Aは、「我々は、我々が同じ名前を適用する多くのものを一まとめにして、その一組ごとにそれぞれ一つのエイドス〔アイデア〕を立てる」と言う。

⁶¹⁾ アリストテレス『形而上学』A巻（第1巻）第6章987b14-18。

る⁶²⁾。数学的対象は「複数ありうる」という点で、「ひとつしかない」という特徴を持つアイデアと異なる。ただし、それら複数の数学的対象が「三角形」という共通の名前で呼ばれるのは三角形のアイデア（これはひとつしかない）に似ているからだ。つまり、「三角形」という一般名に意味を与えるのはやはり三角形のアイデアなんだ。

Q氏 つまり、「感覚的個物」（描かれた図や三角おにぎり）と「数学的アイデア」と「数学的対象」の三つが区別されるということか。

P氏 そのとおり。

Q氏 そして、「数学的対象」は「数学的アイデア」と「感覚的個物」の中間に位置する。こう理解していいか。

P氏 そう理解していい。しかし、数学的対象はアイデアに近い。ほとんどアイデアと同じだと考えていい。感覚的個物がアイデアに「似ている」という場合、「感覚的個物は不完全であって、アイデアに似ることはできてもそっくり同じにはなれない」という意味がそこに含まれている。たとえば、三角おにぎりの形が「三角形」だというのは大雑把に言っているだけだ。これに対し、数学的対象と数学的アイデアの間には「不完全」対「完全」という対照はまったくない。どちらも完全な三角形であることに変わりはない。三角おにぎりや図に描かれた三角形（感覚的個物）が不完全であるのに対し、数学的対象と数学的アイデアはどちらも完全だ。

Q氏 結局、「数学的対象としての三角形」は「三角形のアイデア」と「感覚的個物としての三角形」（描かれた図や三角おにぎり）の中間にあるけれど、はるかにアイデア寄りだということだね。

P氏 そのとおり。

Q氏 分かったよ。

P氏 いずれにしても、アイデア論は数学的アイデアの場合に支持者が一番多い⁶³⁾。そして、プラトンは「数学的アイデアが存在する以上、間違いなくアイデアというものは存在する」と考えていたのだと思うよ。

Q氏 「数学的アイデアの存在を認めるなら、他のものについてもアイデアが存在する可能性がある」ということだね。

P氏 そうだね。数学的アイデアが存在するというのが、アイデアの存在に関するひとつめの論拠であり、アイデアは一般名の意味の説明に使えるということがふたつめの論拠だ。

Q氏 でも、Pさんは「プラトンのアイデア論はソクラテスが課した条件を満たす知を見つける試みだった。そして、その条件は相対主義に対抗するために厳しいものだった」と言ったよね⁶⁴⁾。

P氏 そうだよ。

Q氏 そして、その厳しい条件とは「価値に関する」と「定義を知っている」のふたつだった⁶⁵⁾。

⁶²⁾ プラトン『国家』第6巻第20章510C。

⁶³⁾ 本論文第Ⅱ章第1節「数学的アイデア」で述べたように、ほとんどの数学者は数学的アイデアの存在を事実上認めている。

⁶⁴⁾ 本論文第Ⅰ章第4節「相対主義との対決」。

⁶⁵⁾ 本論文第Ⅰ章第3節「美や善に関する知識」。

P氏 そのとおり.

Q氏 ここまで出て来たアイデアは「数学的アイデア」と「意味としてのアイデア」だった. 肝心の「価値に関する」という条件はまだ登場していないね.

P氏 そうだね. ただ, 「相対主義に対抗する」という点はもう登場しているよ.

Q氏 どういうこと?

P氏 数学に関して相対主義者の出番はないということだ. いくら相対主義者でも「私にとって, 三角形の内角の和は 180 度ではない」と言い張ることは無理だね. では, いよいよ価値に関するアイデアについて検討しよう.

3 価値的アイデア

P氏 まず, 美について考えてみよう. Qさんはどんな物が「美しい」と思う?

Q氏 そうだね. 夕焼け空は美しいと思う.

P氏 確かに美しいね. 他には何が美しいかな.

Q氏 新幹線の中から見えた富士山も美しかったな.

P氏 景色以外に美しい物はあるかな.

Q氏 小学生のとき担任の先生が結婚したんだけど, ウェディングドレス姿の先生が美しかったのをよく覚えているな.

P氏 いい思い出だね.

Q氏 美しい絵というものもある. 実物はたいしたことがなくても, 絵で美しく描くことができる.

P氏 そうだね. では, 物以外の何かについて「美しいなあ」と思ったことはないかな.

Q氏 物以外の何か… あ, サッカーのワールドカップでのシュートが美しかったな.

P氏 動きの美しさだね.

Q氏 フィギュアスケートのジャンプも美しいよ.

P氏 ここまであげてくれた例はすべて目に見えるもの, つまり視覚の対象だけど, 他の感覚の対象で美しいものはあるかな.

Q氏 美しい声がある. 「美声」と言うから.

P氏 そうだね. 聴覚の対象である音にも美しいものがあるよね.

Q氏 それから, 美しいメロディーがある.

P氏 そういうメロディーは楽器で演奏しても (つまり「美声」で歌わなくても) やっぱり美しいよね.

Q氏 美しい言葉もある. 「美辞麗句」と言うよね.

P氏 そうだね.

Q氏 美しい行為もあるかもしれない. たとえば, 人助けは善い行為だけど, 「美しい行為」と呼ぶことができる.

P氏 なるほど. 美しいものはいろいろある. 美の具体例はさまざまだね.

Q氏 目で見える景色、人の姿、動き、絵、それから、耳で聞ける声やメロディー、読んで分かる言葉、行為、いろいろあるね。

P氏 さあ、ここで問題だ。これらいろいろな具体例がすべて「美」という同じ名前と呼ばれるのはなぜだろう。

Q氏 あ～、その答えは分かる。さっきの「意味としてのアイデア」だね。

P氏 そのとおり。

Q氏 美しい景色、美しい人、美しい動き、美しい絵、美しい声、美しいメロディー、美しい言葉、美しい行為、これらはすべてただひとつの美のアイデアに似ているから、「美」というひとつの共通の名前で呼ばれる⁶⁶⁾。こういう説明になる。

P氏 そのとおりだ。美のアイデアが存在するなら、「美」という一般名の意味が説明できる。

Q氏 すると、美のアイデアは、三角形のアイデアが持っていた特徴を持っているのかい。

P氏 プラトンはそう主張している。美のアイデアも三角形のアイデアと同様に、①知性の対象である、②厳密に正確である、③消滅しない、④人間から独立である、そして、⑤ひとつだけである、という特徴を持っているんだ。

Q氏 美のアイデアが「②厳密に正確」というのはどういうこと？

P氏 職人さんが机のアイデアを手本に感覚的個物としての机を作る場合、なかなか理想の机にならない。つまり、作られた机は机のアイデアに比べれば不完全だ。それと同じで、感覚的個物としての美しい物は美のアイデアに比べれば不完全なんだ。たとえば、昨日の夕焼けは確かに美しかったけど、今日の夕焼けの方がもっと美しいかもしれない。とすれば、昨日の夕焼けの美しさは不完全だった。

Q氏 では、美のアイデアの美しさは完全なのか。

P氏 そうだよ。美のアイデアの美しさは完全だから、美のアイデアよりもさらに美しいものは存在しない。これに対し、昨日の夕焼けは、さらに美しいもの（たとえば、今日の夕焼け）が存在しうるから、不完全な美しさだ。

Q氏 そして、夕焼けは目で見えるから感覚の対象だけど、美のアイデアは知性の対象なんだね。

P氏 そのとおり。厳密に正確な三角形であるような物体はこの宇宙に存在しないし、人間が作り出すこともできない。同じように、完全な美しさを持つ物体はこの宇宙に存在しないし、人間が作り出すこともできない。しかし、厳密に正確な三角形（三角形のアイデア）を考えることができるように、完全な美（美のアイデア）を考えることはできる。つまり、美のアイデアは「①感覚の対象ではなく、知性の対象である」という特徴を持つんだ。

Q氏 う～ん、本当に考えることができるかな。「完全な美」という言葉を口にすることはできるけど、

⁶⁶⁾ プラトン『パイドン』第49章100C-Dによれば、美しいものはその色や形のゆえに美しいのではなく、〈美そのもの〉（すなわち、美のアイデア）の臨在あるいは分有あるいは共有によって美しい。また、プラトン『国家』第6巻第18章507Bによれば、多くの美しいものが存在するが、〈美そのもの〉は一つだけ存在する。そして、前者は見られるが、思惟によって知られることはなく、後者は思惟によって知られるが、見られることはない。

P氏 芸術家が作品を作るときにめざしているのは完全な美だ。こう言えないかな。

Q氏 職人さんが机のアイデアを手本に机を作るように、芸術家は美のアイデアを手本に作品を作るということか。

P氏 そういうことだね。

Q氏 自然物である美しい景色の場合はどうなる？

P氏 美のアイデアに似ているから美しい。こうなる。

Q氏 美のアイデアは、三角形のアイデアと同じように、「③消滅しない」という特徴を持っているのかい。

P氏 そうだよ。美のアイデアは「永遠に存在するものであり、生成消滅も増大減少もしない」とプラトンは主張している⁶⁷⁾。

Q氏 では、美のアイデアも、三角形のアイデアと同じように、「④人間から独立である」という特徴を持っているということか。

P氏 そのとおり。美のアイデアは人間が考えようが考えまいが存在するし、さらには、人間が存在しようが存在しまいが存在する。アイデアは消滅しないから、人類が滅亡しようが、美のアイデアは存在する。つまり、人間から独立だ。

Q氏 う～ん、では、人類が地球上に現れる前や、人類が滅亡した後も、美のアイデアは存在するのか。

P氏 そうだよ。人類滅亡後も夕焼けはきっと美しいだろう。それは美のアイデアに似ているからだ。アイデア論はこう主張する。

Q氏 う～ん、壮大だけど、信じがたいな。

P氏 でも、三角形のアイデアが人間から独立だということを認めることができるなら、美のアイデアについても「人間から独立だ」と認めることができないかな。

Q氏 数学の話と価値の話は別だと思うよ。

P氏 「数学的アイデアから価値的アイデアへ話が飛躍している」と言いたいのかな。

Q氏 そうだよ。数学は客観的だけど、価値は人によって違うからね。何を「美しい」と感じるかは人それぞれなんじゃないかな。

P氏 そう考えるのは、相対主義への一歩だね。

Q氏 「相対主義に反対したい」というソクラテスやプラトンの動機は分かるけど、数学的アイデアと価値的アイデアは直接にはつながらないんじゃないかな。

P氏 確かに直接にはつながらないね。しかし、数学的アイデアと価値的アイデアをつなぐものがある。

Q氏 何？

P氏 意味としてのアイデアが両者をつなぐ。

Q氏 どんなふうにつなぐんだ？

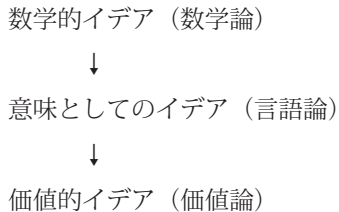
P氏 「三角形」という語も「美」という語も一般名だ。つまり、多くの感覚的個物に当てはまる。な

⁶⁷⁾ プラトン『饗宴』第29章 210E-211A.

ぜさまざまな感覚的個物が同じひとつの名前で呼ばれるのか、このことを説明するのが、意味としてのアイデアだった。つまり、それら多くの個物はどれも共通のひとつのアイデアに似ているから、同じ名前前で呼ばれる。つまり、意味としてのアイデアという点において、「三角形」のような数学的対象を表す一般名も、「美」のような価値を表す一般名も違いはない。

Q氏 意味としてのアイデアとしては、三角形のアイデアも美のアイデアも同じだということか。

P氏 そのとおり。つまり、プラトンのアイデア論は次のような仕組みになっている。



こんなふうに、意味としてのアイデアが数学的アイデアと価値的アイデアをつないでいる。言い直せば、「数学的アイデア」と「意味としてのアイデア」の存在から「価値的アイデア」の存在を引き出そうとしているんだ⁶⁸⁾。つまり、プラトンのアイデア論は数学論でもあり、言語論でもあり、価値論でもある。

Q氏 なるほど、そういう仕組みになっているんだね。

P氏 そして、価値的アイデアが存在するなら、(相対主義者が数学的定理を否定できなかったように、) 価値も客観的な存在だということになる。

Q氏 相対主義者に対抗できるというわけだな。

P氏 そうだよ。美のアイデアのような価値的アイデアが人間から独立の存在であるなら、「価値の基準は人によってそれぞれだ」という相対主義者の主張は成り立たなくなる。「数学的定理は人によってそれぞれだ」と言えないようにね。

Q氏 美以外の価値についてもプラトンは同じ主張をしているの？

P氏 そうだよ。プラトンは、価値的アイデアとして、美のアイデアの他に「善」「正義」「勇氣」「敬虔」「節制」などについてもアイデアの存在を主張している。これらのアイデアが存在すれば、相対主義に対抗できる。

Q氏 相対主義に対抗するために、プラトンは数学論、言語論、価値論を総動員しているんだね。

P氏 そのとおりだ。

⁶⁸⁾ プラトンの著作は戯曲形式で書かれており、学術論文ではない。それゆえ、「数学的アイデア→意味としてのアイデア→価値的アイデア」というアイデア論の構造がプラトンの著作の中で明示されているわけではない。アイデアに関して複数の対話篇のあちこちでなされている記述にもとづいて筆者が想定した構造である。また、「数学的アイデア」「意味としてのアイデア」「価値的アイデア」という3つの側面はそれぞれ従来から指摘されているが、「数学的アイデア→意味としてのアイデア→価値的アイデア」という構造を指摘した点が本論文の新しさである。

4 知への愛

Q氏 相対主義に対抗するためにソクラテスが求めた「知」の条件は「価値に関する」と「定義を知っている」というふたつだったよね⁶⁹⁾。プラトンのアイデア論はこれらの条件を満たしているのかな。

P氏 「価値に関する」という条件は満たしているよね。「美」「善」「正義」「勇気」「敬虔」「節制」などの価値に関してアイデアが存在すると主張しているのだから。

Q氏 では、「定義を知っている」という条件についてはどうかな。

P氏 ソクラテスの話をしたとき、「待ち合わせに遅刻したとしても、倒れた老人を助けることは善いことだ」とか「特殊詐欺の手伝いだと気づいた場合、雇い主との約束を破ることは善いことだ」とQさんは言ったよね。このとき、「善い」という同じ言葉を2回使っている。両方に共通な何かが「善」の定義になる。

Q氏 両方に共通なのは「善のアイデア」だということか。

P氏 そのとおり。つまり、「善い」とは「善のアイデアに似ている」ということだ。

Q氏 う〜ん、「善のアイデアに似ている」というのが「善」の定義だということか。

P氏 そうだよ。Qさんが「善い」という言葉を2回使ったとき、その都度、善のアイデアとの類似性に気づいたから、「善い」という言葉を使ったわけだ。

Q氏 しかし、善のアイデアを知っていないと、この定義は理解できないよね。

P氏 それはそうだ。しかし、プラトンによると、人間は生まれつき善のアイデアを知っている⁷⁰⁾。

Q氏 そうは思えないな。だって、もし人間が生まれつき善のアイデアを知っているなら、どうして人々の間で価値観の対立が生まれるんだ。善のアイデアはひとつしかないんだから、皆が善のアイデアを知っているなら、価値観の対立は生じないはずだ。

P氏 素晴らしく鋭い指摘だね。プラトンによると、生まれつき知っているんだけど、忘れてしまっているんだ⁷¹⁾。

Q氏 忘れちゃったら、知らないのと同じにならないか。

P氏 いや、完全に忘れていないわけではない。アイデアに似ている感覚的個物（たとえば、人の行為）を見ると、かすかに思い出す⁷²⁾。だから、そのとき「善い」という語を使うんだ。プラトンのこの考えは「想起説」と呼ばれている。

Q氏 つまり、「アイデアをしっかりと思い出せば、価値観の対立はなくなるはずだ」とプラトンは考えていたのか。

P氏 プラトンが「アイデア」に対してそういう希望を持っていたのは確かだよ。

Q氏 でも、アイデアをしっかりと思い出す方法なんてあるのかな。

69) 本論文第I章第3節「美や善に関する知識」。

70) プラトン『パイドン』第20章75C-D。

71) プラトン『パイドン』第20章75E。

72) プラトン『パイドン』第20章75E。

P氏 あるよ。まず数学を学ぶことによって、感覚に頼らず知性だけで判断する習慣が身に付く⁷³⁾。三角の形をしたもの（描かれた図やおにぎり）は感覚によって知ることができるけれど、不完全で変化した消滅するものにすぎない。他方、数学が扱う数学的対象や数学的アイデアは、感覚的個物（描かれた図やおにぎり）とは別のものであって、完全であり永遠に消滅しない。数学を学ぶことによって数学的アイデアを思い出すことができる。

Q氏 だから、プラトンの学園アカデメイアでは数学を重視していたんだね。

P氏 しかし、数学を学ぶだけでは価値的アイデアをしっかりと思い出すことはできない。

Q氏 他に何をやればいいんだ？

P氏 哲学的対話をやるんだ⁷⁴⁾。アカデメイアで熱心におこなわれていた。

Q氏 哲学的対話ってどんなことをやるのかい。

P氏 複数の人間が言葉を使って議論して、たとえば、善と快樂の関係を検討する。「身体の中に健康や強さを作り出す快樂は善い快樂だけど、不健康や弱さを作り出す快樂は悪い快樂だ。したがって、善と快樂は別ものだ⁷⁵⁾」。こんな議論がなされた。

Q氏 う～ん、それでアイデアに関して何が分かったことになるのかな。

P氏 善のアイデアと快樂のアイデアの相互関係が分かったことになる。

Q氏 「快樂のアイデア」というのがあるんだね。

P氏 プラトンははっきり言っていないけど、多種多様な快樂が「快樂」という一般名で呼ばれている以上、アイデア論にもとづけば、快樂のアイデアが存在するはずだ。

Q氏 アイデアどうしの相互関係が分かると何がいいのかな。

P氏 アイデアについての知は言葉で表現するのが難しい。しかし、アイデアどうしの相互関係が明らかになれば、それだけアイデアについて明らかになる（というか、思い出したことになる）。アカデメイアでは「知恵」「勇気」「節制」「正義」や「存在」「非存在」「生成」「同」「異」「一」「多」などのアイデアどうしの関係について徹底的な議論がおこなわれた⁷⁶⁾。

Q氏 なるほどね。

P氏 もうひとつ例をあげるよ。プラトンによると、人間の魂は「知性」「気概」「欲望」の三つの部分からできている。知性は知恵を持っている。その知性が気概をコントロールすることによって人間は「勇気ある人」になれる。

Q氏 知恵がないと勇気を持てないということか。

P氏 そうだよ。状況を見捨てて猪突猛進するのは「無謀」であって「勇気」ではないからね。その状況において何をするのが最善なのか、それを教えるのが知性だ。

73) プラトン『国家』第7巻第6章～第12章（521C-531C）。

74) プラトン『国家』第7巻第13章～第14章（531D-535A）。

75) プラトン『ゴルギアス』499D, 500D。

76) プラトンの『国家』『パルメニデス』『ソピステス』などにおいてそれらの議論が紹介されている。

Q氏 なるほど。すると、知性は欲望もコントロールするのかな。

P氏 そのとおり。知性が欲望をコントロールすることによって人間は「節制ある人」になれる。

Q氏 「節制」って「ほどほどの欲望」ってことか。

P氏 「ほどほど」というより、「自分の体調や目的を踏まえて最善な程度で欲望を満たすこと」が節制だよ。そして、欲望をどの程度で満たすのが最善なのかを判断するのは知性だ。たとえば食欲まかせで食べただけ食べていると生活習慣病になったりするからね。

Q氏 勇気ある人間になるためにも節制ある人間になるためにも知恵が必要だとプラトンは言いたいんだね。

P氏 そうなんだ。そして、知性が気概と欲望をコントロールして、魂のこれら3つの部分が調和しているとき、その人は「正しい人」すなわち「正義にかなう人」になれる。プラトンはこう言う⁷⁷⁾。

Q氏 ほう、ここで「正義」が出てくるのか。

P氏 自分の魂にそのような状態を作り出す行為が「正しい行為」「正義にかなう行為」であり、そのような状態を損なう行為が「不正な行為」「正義に反する行為」だとプラトンは言っている⁷⁸⁾。

Q氏 自分がどんな行為をするかに応じて、自分の魂の状態が変わるということか。

P氏 そのとおり。結局、この議論には「知恵」「勇気」「節制」「正義」という4つの価値的アイデアが登場しているんだ。

Q氏 「知恵によって勇気と節制が実現する」という関係が「正義」だとプラトンは言っているんだね。

P氏 そのとおり。もっともこれは「個人の魂における正義」であって、プラトンは「国家における正義」についても論じている。そこでも「知恵」「勇気」「節制」「正義」という4つのアイデアの間の同様な関係が主張されている⁷⁹⁾。このように哲学的対話の中でアイデアに関する徹底的な議論がおこなわれていたんだ。

Q氏 しかし、複数の人間で議論するのでなく、ひとりで考えるのはだめか。

P氏 だめというわけじゃない。しかし、きわめて難しい問題については、対話の参加者の間での同意を頼りに検討を進めるのが有効なやり方だ。人間の知恵には限りがあるから、「三人寄れば文殊の知恵」じゃないけど、お互いの主張の弱い点を批判し合うことによって、アイデアを少しでも思い出そうと努めるんだ。アイデアを知ることはきわめて難しい課題⁸⁰⁾だからね。これが哲学的対話をおこなう理由だよ。

Q氏 なるほどねえ。Pさんの話を聞いて、プラトンのアイデア論が、相対主義に対抗するために価値の定義をもたらしとした試みだったということはよく分かったよ。

77) プラトン『国家』第4巻第16章 441E-442D。

78) プラトン『国家』第4巻第16章 443E-444A。

79) プラトン『国家』第4巻第6章～第10章 (427D-434C)。

80) 人々がアイデアを思い出せば、価値観の相違はなくなるはずだが、アイデアを思い出すことは実際には容易なことではない。それゆえ、プラトンは「アイデアを思い出す訓練を長い年月をかけて受けた少数の人々が交替で国を統治することが望ましい」と主張する（プラトン『国家』第5巻第18章 473D、第7巻第18章 540A-B）。

P 氏 それはよかった。話したかいがあったよ。

Q 氏 でも、イデア論に納得できるかと言えば、僕は納得できないな。特に「価値的イデアは人間から独立した不滅の存在だ」という点が一番納得できない。P さん自身はプラトンの考えに賛成なの？

P 氏 さっきも言ったように、プラトンのイデア論は数学論であり、言語論であり、そして価値論だ。これら 3 つのうちで、数学論としてのイデア論が一番説得力を持っている⁸¹⁾。しかし、言語論としてのイデア論の説得力は数学論ほどではない⁸²⁾。そして、価値論としてのイデア論になると、説得力はさらに下がる⁸³⁾。これら 3 つは別々に評価すべきだと思う。

Q 氏 価値的イデアに関してプラトンの議論は説得力がないということか。

P 氏 率直に言って、価値的イデアの存在をプラトンはうまく立証できていないと私は思う⁸⁴⁾。

Q 氏 すると、プラトン哲学は失敗だったということになるか。

P 氏 そうは思わない。相対主義という現代にも存在する問題を指摘し、それに対抗するという課題を追求したことは大きな功績だ。そして、何よりも「伝統や常識や思い込みでなく、知性の力で問題を解決しよう」という姿勢を貫いたことは、哲学という営みが生まれるうえで絶対に必要だった。実際、アカデメイアでプラトンはイデア論を弟子たちに押し付けることはしなかった。自由に哲学的対話をさせたんだ。

Q 氏 アカデメイアではプラトンの考えも批判されたのかい。

P 氏 もちろんだ。プラトンの弟子のアリストテレスはイデア論を徹底的に批判しているよ⁸⁵⁾。

81) 本論文第 2 章第 1 節「数学的イデア」末尾で述べたように、多くの数学者はプラトニストである。ただし、イデア論を批判するアリストテレスは数学的イデアの存在も否定する。アリストテレス『形而上学』M 巻（第 13 巻）第 2 章～第 3 章は、数学的对象が感覚的個物から離れて存在することを否定し、数学的对象とは「感覚的個物から抽象されたもの」だと主張する。また、アリストテレス『形而上学』Z 巻（第 7 巻）第 10 章 1036a2-12 は、数学的对象とは「感覚的事物に内在する思维的質料（人間が思惟することによって把握される質料）」だと主張する。

82) プラトンの言語論は「言葉の意味はその指示対象だ」という暗黙の前提を持っている。この前提は哲学的言語論の歴史を長年にわたって支配してきたが、ウィットゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein, 1889～1951 年、オーストリア出身、イギリスで活動）は、ウィットゲンシュタイン（2009）において、この前提を批判し、「言葉の意味は言語ゲームにおけるその使用だ」と主張した。ウィットゲンシュタインのように考えれば、一般名の意味としてイデアを要請する必要はない。

83) たとえば、アリストテレス『ニコマコス倫理学』第 1 巻第 6 章 1097a8-13 は、医者の例をあげ、「イデアはひとつしかないから、具体的な個々の患者を相手に多様な対応が必要である実践の場面では役に立たない」という趣旨の批判をしている。患者の体質や症状は多様であるから、「健康」のイデア（ひとつしか存在しない完全な健康）を医者が知ったとしても、その知識からは、目の前の患者に対してどのように治療すればよいかは出て来ない、ということである。

84) 本論文ではソクラテスやプラトンの哲学の内実を明らかにすることを目指したので、「価値的イデアの存在をプラトンはうまく立証できていない」と筆者が考える理由は別稿で論じる。要点だけ述べれば、「数学的イデア」の存在から「価値的イデア」の存在を引き出すための媒介の役割を持つ「意味としてのイデア」の想定が言語論として適切でないということである。前述の注 82 も参照されたい。

また、アド（2021）pp. 154-155 は、「プラトンたち古代の哲学者は真理の体系的理論の提示ではなく、生き方を方向づける方法を弟子たちに教えることをめざしていた」すなわち「プラトン哲学を精神の修養として捉えることによって、プラトンの著作に含まれる不整合が説明できる」と主張する。納富（2015）p. 96 は「イデアを語ろうして三角形を例に持ち出すのは、適切ではない」と言い、「『イデア』は普遍者についての一般的な理論などではありません。一つひとつの現実を見据えて問題に向き合う、哲学の実践です。そして、言葉を語る私たち自身の変容です」と言う。しかし、仮にアドや納富の主張が正しいとしても、プラトン哲学の理論的側面への批判は可能かつ必要である。

85) アリストテレスは『形而上学』A 巻（第 1 巻）第 9 章および M 巻（第 13 巻）第 2 章～第 5 章においてプラトンの

Q氏 自分の先生を批判するなんて、アリストテレスは勇気があるね。

P氏 プラトン自身も『パルメニデス』という対話篇の中で自分のイデア論の理論的弱点を批判的に吟味している⁸⁶⁾。

Q氏 へえ、そうなんだ。

P氏 真実から目をそらさない勇気を持ってとことん考えることが知への愛（フィロソフィア）には必要だ。自分の考えに固執したり、先生に遠慮して批判しなかったりするの、知への愛じゃない⁸⁷⁾。

Q氏 そうか。じゃ、僕もPさんの考えを遠慮なく批判することにしよう（笑）。

P氏 既にいろいろ批判していたよ（笑）。対話というのは、哲学をおこなう上でとても有効な方法なんだ。ソクラテスやプラトンの哲学は「相対主義」という現代にも存在する問題を扱っており、相対主義を自分自身の問題として考えるように私たちに迫っている。もし「イデア論」というプラトンの解決策を認めないなら、相対主義に対して、どのような解決策があるか私たち自身で考えなければならない。結局、自分自身の問題として考えることを通してしかソクラテスやプラトンの哲学の核心を理解することはできない⁸⁸⁾。対話篇という形式をプラトンが選んだねらいもそこにあったのだと思う。

イデア論（および数学論）を約 20 項目にわたって批判し、また、『ニコマコス倫理学』第 1 巻第 6 章では価値的イデア（善のイデア）に焦点をあてて批判している。さらに、（注 26 で前述したように）『ニコマコス倫理学』第 1 巻第 3 章や第 7 章において「ことがらの性質が許す限りでの厳密性を求めるべきであり、美や善については必然性を求めるべきでなく蓋然性で満足すべきだ」と主張する。この主張は価値に関する定義（すなわち必然性）を求めたソクラテスやプラトンへの批判として読むことができる。

⁸⁶⁾ 『パルメニデス』においてプラトンがイデア論を放棄したかどうかについては研究者の間で議論がある。しかし、金山（2014）pp. 175-176 も言うように、『パルメニデス』より後に書かれた『ティマイオス』でプラトンがイデア論を主張していることから、プラトンはイデア論を生涯維持していたと考えるべきであろう。

⁸⁷⁾ プラトン『パイドン』第 40 章 91B-C においてソクラテスは「君たちはソクラテスという人間のことは考慮することなく、真理をこそ一層考慮してくれ」と言う。アリストテレス『ニコマコス倫理学』第 1 巻第 6 章 1096a16-17 も、イデア論を批判する際、「真理と友のどちらも愛すべきであるが、真理の方をより尊重するのが敬虔なことである」と言う。藤沢（1998）pp. 63-64 によれば、対話篇という形式をプラトンが晩年まで維持した理由の一つは、ソクラテスの言う「無知の自覚」がプラトンにおいて生涯保たれていたこと（すなわち、問答による吟味を受ける用意が常にあったこと）である。

⁸⁸⁾ 納富（2015）p. 17 はプラトンの対話篇を読む意味について次のように言う。「二千年の時を超えて、ソクラテス、そして、プラトンは問いかけます。「君は、この問いにどう答えるのかい？」[...]「対話篇を読む」とは、現代の視点からあれこれ解釈を提示することではなく、プラトンを現代に甦らせ、彼の提示した対話の現場から私たち自身が哲学を立ち上げることに他なりません」。

文献表

【プラトンとアリストテレスの著作】（プラトンの著作はおおよそ執筆年代順）

- プラトン『ソクラテスの弁明』（納富信留訳、光文社古典新訳文庫、2012年；田中美知太郎訳『プラトン全集1』岩波書店、1975年；山本光雄訳、角川文庫、1954年；久保勉訳、岩波文庫、1927年）。
- プラトン『ラケス』（三嶋輝夫訳、講談社学術文庫、1997年；生島幹三訳『プラトン全集7』岩波書店、1975年）。
- プラトン『ゴルギアス』（三嶋輝夫訳、講談社学術文庫、2023年；中澤務訳、光文社古典新訳文庫、2022年；加来彰俊訳『プラトン全集9』岩波書店、1974年；加来彰俊訳、岩波文庫、1967年）。
- プラトン『メノン』（渡辺邦夫訳、光文社古典新訳文庫、2012年；藤沢令夫訳『プラトン全集9』岩波書店、1974年）。
- プラトン『饗宴』（山本巍訳、東京大学出版会、2016年；中澤務訳、光文社古典新訳文庫、2013年；鈴木照雄訳『プラトン全集5』岩波書店、1974年；久保勉訳、岩波文庫、1952年）。
- プラトン『パイドン』（納富信留訳、光文社古典新訳文庫、2019年；朴一功訳『西洋古典叢書G54』京都大学学術出版会、2007年；岩田靖夫訳、岩波文庫、1998年；松永雄二訳『プラトン全集1』岩波書店、1975年）。
- プラトン『国家』（藤沢令夫訳、岩波文庫、1979年；藤沢令夫訳『プラトン全集11』岩波書店、1976年）。
- プラトン『パルメニデス』（田中美知太郎訳『プラトン全集4』岩波書店、1975年）。
- プラトン『ソピステス』（藤沢令夫訳『プラトン全集3』岩波書店、1976年）。
- プラトン『ティマイオス』（種山恭子訳『プラトン全集12』岩波書店、1975年）。
- プラトン『法律』（森進一、池田美恵、加来彰俊訳『プラトン全集13』岩波書店、1976年）。
- プラトン『第七書簡』（長坂公一訳『プラトン全集14』岩波書店、1975年）。
- アリストテレス『形而上学』（出隆訳『アリストテレス全集12』岩波書店、1968年）。
- アリストテレス『ニコマコス倫理学』（渡辺邦夫・立花幸司訳、光文社古典新訳文庫、2015-2016年；神崎繁訳『アリストテレス全集新版15』2014年；高田三郎訳、岩波文庫、1971-1973年）。

【その他の文献】

- アド、ピエール（2021）『生き方としての哲学』小黒和子訳、法政大学出版局。
- ディオゲネス・ラエルティオス（1984）『ギリシア哲学者列伝（上）』岩波文庫（原典は3世紀）。
- フレーゲ、G（1999）「思想」『フレーゲ著作集4 哲学論集』黒田亘・野本和幸編、勁草書房、pp. 203-235（この論文の初出は1918年）。
- 藤沢令夫（1998）『プラトンの哲学』岩波新書。
- ヘロドトス（1972）『歴史（下）』松平千秋訳、岩波文庫（原典は前5世紀）。
- 廣川洋一（1980）『プラトンの学園アカデメイア』岩波書店。
- 伊佐敷隆弘（2024）「黄金律と競争原理——他人からされたくないことを他人にしなければならないのか——」日本大学経済学部『研究紀要』vol. 99, pp. 43-54。
- 石井雅巳（2019）『西周と「哲学」の誕生』堀之内出版。
- 岩田靖夫（2014）『増補 ソクラテス』ちくま学芸文庫。
- 加来彰俊（2004）『ソクラテスはなぜ死んだのか』岩波書店。
- クセノフォン（2022）『ソクラテスの思い出』相澤康隆訳、光文社古典新訳文庫（原典は前4世紀）。
- 金山弥平（2014）「イデア」内山勝利編『プラトンを学ぶ人のために』世界思想社、第Ⅲ部第4章、pp. 158-177。
- 栗島紀子（1966）「訳語の研究——西周を中心に——」東京女子大学『日本文学』vol. 27, pp. 69-87。
- 納富信留（2008）「ソフィスト思潮」内山勝利編『哲学の歴史1 哲学誕生』第Ⅲ章、pp. 245-301。
- 納富信留（2012）「解説」「年譜」プラトン『ソクラテスの弁明』納富信留訳、光文社古典新訳文庫。
- 納富信留（2015）『プラトンとの哲学——対話篇をよむ』岩波新書。
- 納富信留（2017）『哲学の誕生——ソクラテスとは何者か』ちくま学芸文庫。
- 納富信留（2021）『ギリシア哲学史』筑摩書房。
- 荻野弘之（2003）『哲学の饗宴』日本放送出版協会。
- Wittgenstein, Ludwig（2009）*Philosophische Untersuchungen*, 4th ed., Blackwell（初版は1953年）。